

成
り
王

ヨ
シ
ダ
ケ
イ

【あらすじ】

明治時代後半。大金持ちの次男、是本久次郎（12）は大物「成り王」になる夢を持ちながら豪快な祖父兵右衛門（70）に可愛がられていた。だが兵右衛門の死で家は没落。久次郎は幼なじみのきく（9）への未練もありながらも奉公にだされる。6年後。成長した久次郎であったが、後輩の沢村（15）と共に物足りない仕事に鬱々とした日々を送っていた。だがある日、清国に亡命者・中山樵（28）を助けたことから華僑の商人越祥応（37）と出会う。越と出会った目標が決まった久次郎は奉公を終え、兄庄造（23）と叔父善五郎（46）が設立した銀行を手伝うことになる。だが、奉公の間、きくが芸妓に売られたことを知り、自暴自棄になった久次郎は家の財産を持ち出し放蕩三昧。その後、知り合った芸妓の富代（20）に支えられ月日は過ぎていく。8年後の明治37年。日露開戦の風雲急告げる世で、困窮した久次郎は「すべてを賭けて勝負に出る」重要さを知り、勘当された実家を説得。全財産を株につぎ込み大勝負に出る。結果、日比谷焼き討ち、銀行取り付け騒ぎの危機を乗り越え、戦勝とともに株価は高騰し久次郎は一躍雄飛する。その後、久次郎は越と再会するが、越は成長したきく（24）を妾にしていた。きくへ「一緒にいるな」と伝える久次郎であったが、きくは拒否。絶望した久次郎は、世界進出への野望をあらわにし、様々な手段を用いて証券会社設立、人材引き抜き、企業買収を行い、芸妓達との酒池肉林に耽っていく。欲望のままに突進する久次郎は、越が関与する亜細亜紡績の買収を企む。一進一退の攻防の中、久次郎は勝利するが、結果、越は自殺し、きくは去る。巨万の富を手に入れた久次郎は、きくは去る。巨万の富を手に残されたのは、全てを失い、困窮した久次郎の富代との平凡な幸せであった。

【登場人物表】

是本久次郎（12）（18）（26）是本家
 次男。日本の金持ちを目指す。
 越祥応（39）（47）華僑の商人
 富代（20）（28）芸妓
 きく（9）（24）久次郎の幼馴染
 是本庄造（17）（23）（31）久次郎の
 兄
 是本善五郎（40）（46）（54）久次郎
 の叔父
 沢村謙吉（15）（23）久次郎の後輩
 是本兵右衛門（70）久次郎の祖父
 中山樵（28）（38）清国人亡命者
 駒場亮一（55）桜製糖社長
 滝田市郎（42）桜製糖の幹部
 牟田啓一（54）亜細亜紡績社長
 初代野田徳兵衛（50）野田商会社長
 二代目野田徳兵衛（28）野田商会二代目
 坂入（34）丸藤社員
 さな（17）富代の妹
 後藤・清正丁稚頭
 取立屋
 清正の小僧、丁稚達
 清正主人
 清国人密偵 1・2
 女中・是本家女中
 芸妓達
 芸妓女将（57）
 用務員
 男 1・2
 労働者監督
 新聞屋
 マセソン商会イギリス人店員
 探偵
 片足の無い兵士
 群衆
 預金者
 山田銀行頭取
 上田銀行頭取
 暴漢

店主の妻	店主	井上馨	芸者	投資家 1・2	役員	社員 1・2	渋沢栄一、大隈重信、犬養毅、桂太郎	医者
------	----	-----	----	---------	----	--------	-------------------	----

○是本家・庭園

T・明治22年（1889年）。
見事な藤と牡丹の花々。広い庭園。

○同・縁側

将棋を指す是本久次郎（12）と是本
兵右衛門（70）。兵右衛門の指し手
は王将。

兵右衛門「久次郎。さあどうだ」

久次郎は歩を兵右衛門の陣地に入れる。
久次郎は歩をそのまま。兵右衛門は久
次郎の歩を裏返す。歩は「と」になる。

兵右衛門「歩は敵地に入り金に成るぞ」

久次郎「あつ。忘れてた」

兵右衛門「世の中も同じ。貧乏人も勝てば金
になれる」

兵右衛門「兵右衛門は得意げに腕を組む。

土地で家を大きくしたんだ」
兵右衛門「ワシも御維新の動乱で、米、酒、

久次郎はニヤニヤする。

久次郎「爺ちゃん。その話。もう千回目」

兵右衛門「いい話は、千回でも万回でもいい
んだ」

久次郎「でも爺ちゃん。オレ。金じゃ嫌だ」

兵右衛門「なに？」

久次郎「成るんだったら」

久次郎「久次郎は王将の駒を指さす。

久次郎「王に成りたい」

久次郎は王将の駒を持ち立ち上がる。

久次郎「オレは成り王になる」

兵右衛門はきよとした後、大笑い。

久次郎は、庭園の外で、きく（9）が

荷を背負って歩くのを見る。久次郎は

大声で呼ぶ。

久次郎「きくちゃん！ あそぼうぜ！！」

きく「きくが来る。

きく「久ちやん。アタシお仕事が・・・」

きくは荷を見せる。荷には草鞋。きく
は去ろうとする。

久次郎「までよ」

久次郎「全部、買った。仕事はおしまい！」
きく「いいいの？」
久次郎「オレが良いつて言ったら良いの！」
久次郎は豪快に大笑い。

○久次郎の家
大きな日本家屋の商家。

○同・久次郎の部屋
是本庄造（１７）が襖を開けて久次郎の部屋に入り怒鳴る。
庄造「久次郎！小遣いで要らん草履を買っただって？ウチだって厳しいんだぞ！」

久次郎「それ。草履を売った銭」
庄造「まさか。あんな草履がこんな金に？」

久次郎「オレが作った学校の試験の予想問題。草履のおまけでつけたら完売した」
庄造「お、お前はっ！草履を友達に売りつけたのか！予想問題なんて餌つけて！」
久次郎「銭の前には友達でも客だよ」

庄造「この不届き者——」
庄造と久次郎はつかみ合い。

○香取神社

蝉の声。夏のお祭りで賑わう神社。鈴、饅頭、お酒など多くの出店。久次郎、きく、兵右衛門、庄造が歩く。咳き込む兵右衛門。出店では造花が販売。店主「これはこれは是本様」
次郎。大量の造花を掴む久次郎。

久次郎「おじさん。これ頂戴」

久次郎「久次郎は大量の造花を買ってきくに渡す。驚くきく。」

庄造「久次郎！無駄遣いが過ぎるぞつ。しかも他人に・・・」

久次郎「他人じゃないよ」

久次郎「オレの嫁だよ」

兵右衛門「オレは赤面。庄造は呆れて首を振る。兵右衛門は豪快に笑う。」

二人とも。覚えておけ」

兵右衛門「これは不満気。咳き込む兵右衛門。れよ」

兵右衛門を心配気に見る庄造と久次郎。

○是本家・玄関。

玄関に出入りする荷物運び。差押の札が付けられた壺、絵などの美術品が外の荷車に差し押さえられていく。話を

取立屋「では、是本さん。よろしいですか？」

善五郎「あれだけ威勢を誇った是本家も今は・・・」

善五郎は取立屋を睨むと取立屋は去る。ふすまの向こうに隠れていた庄造がく

る。善五郎は大きなためいき。

庄造「お、叔父さん。オレどうしたら？」

善五郎「家業の酒造りは？」

庄造「順調です。ただ爺ちゃんの土地、相場、美術品の借金が大きすぎて・・・」

善五郎「たぶん、あそこじゃ・・・」

善五郎「連れてきてくれ。話がある」

○是本家の墓

墓石の前に呆然と立つ久次郎。墓石に「五代目は本兵右衛門」の文字。

庄造の声「いつまでそうしてる」
 庄造「涙目の久次郎が振り返ると庄造。い
 いかげん受け入れろ」
 久次郎「久次郎は庄造から顔をそらし呟く。
 だから兄ちゃんには悲しくないんだ」
 庄造「オレだって悲しい！けどその前に現
 実がある。受け入れなきゃなんなんだよ！」
 庄造「来い、久次郎。話がある」
 ○是本家・居間
 善五郎「居間では善五郎と庄造が正座。久次郎
 奉公にいくんだ」
 久次郎「ほ、奉公？ウチは分限者じゃ？」
 善五郎「今は家業の酒造りで精一杯。爺さん
 の散在で田畑山林も売らなきゃなんのだ」
 久次郎「な、何でオレばっか。兄ちゃん？」
 庄造「この屋敷も売ることになった。俺は爺
 ちゃんを継いで家を守らなきゃならない」
 久次郎「き、きくちやんとは？」
 庄造「あの子とは住む世界が違う。諦めろ」
 久次郎「久次郎はわなわな震えた後、飛び出す。
 庄造は追いかけてようとするが、善五郎
 善五郎「は庄造の腕をつかみ首を振る。
 〇川の上の橋（夕）
 久次郎は橋の上で泣く。草鞋売り帰り
 のきくが通る。きくは久次郎に気づく。
 きく「久ちゃん。泣いてるの？」
 涙を拭う久次郎。きくはじつと久次郎
 を見つめた後、優しく久次郎に語る。
 きく「話してみて」

久次郎「・・・。。爺ちゃん死んで家が傾いて。オレ、奉公に出なきゃならなくて、久次郎「そうしたら。そうしたらもうずっと、きくちゃんに会えない・・・。」言葉が詰まる久次郎。その言葉にきく「あははははっ」オレは真剣に」

久次郎「な、なんだよ！　オレは真剣に」

きく「待てばいいじゃない」

久次郎「え？」

きく「修行して一人前になって。そしたら迎えに来て」

久次郎「む、迎え？」

きく「お嫁さんにくれるんでしょ？」

きく「だいたい久ちゃんはお金の使い方が荒すぎるの。奉公でちゃんとしてきなさい」

きく「いつかなるんでしょ？　コレに」

きく「待つてゐるから」

○ 駅

鉄道に乗る久次郎と善五郎。庄造が久次郎を見送り鉄道が汽笛を鳴らし走る。

○ 鉄道内

善五郎「いいか。久次郎と善五郎は席に座る。れを忘れずに・・・。」

窓の外には川原。川原ではきくが手を振り、きくの前には草履とムシロで作った「なり王」の文字。

久次郎「きくちゃん」

窓を開け手を振る久次郎。

○ 深川・町

Ｔ・６年後。明治２８年（１８９５年）。

和洋折衷の町並みと人々。人力車やラ
ンプが町を飾る。新聞屋が新聞を売る。
颯爽と現れる和服の久次郎（18）。
新聞を買う久次郎。町の時計を見る。
久次郎は悠々と歩く。

○個人商店米問屋「清正」・全景
活気ある個人商店。

○同・居間

10代前半の丁稚達が正座で食事の前。
沢村謙吉（15）の前には食膳が無い。

後藤「沢村っ！今週の売り上げビリはお前
だ！罰として昼飯は抜きっ！」

後藤「下を向く沢村の腹はグーッと鳴る。」

後藤「いいか。半人前のお前らはここを出た
ら野垂れ死ぬ。大切なのは上の者への感謝。

分かったか！」

後藤「是本！遅刻だぞっ！」入る久次郎。

久次郎「沢村は取引より事務向き。そんなこ
とも分からのかねえ」

久次郎「せせら笑いをする久次郎に後藤は迫る。
久次郎「売り上げ。今週のです」

久次郎「久次郎は、後藤の手に銭を握らせる。

久次郎「ちなみに先週の三倍」

久次郎「驚く丁稚達。後藤の肩を組む久次郎。

久次郎「後藤さん。銭儲けで大事なのは感謝
じゃない」

久次郎「自分の頭と心臓を指す久次郎。

久次郎「久次郎はにやりと笑う。度胸さ」

久次郎「久次郎はにやりと笑う。度胸さ」

久次郎「久次郎はにやりと笑う。度胸さ」

久次郎「久次郎はにやりと笑う。度胸さ」

久次郎「久次郎はにやりと笑う。度胸さ」

久次郎「久次郎はにやりと笑う。度胸さ」

久次郎「久次郎はにやりと笑う。度胸さ」

久次郎「久次郎はにやりと笑う。度胸さ」

久次郎「久次郎はにやりと笑う。度胸さ」

久次郎「久次郎はにやりと笑う。度胸さ」

○横浜港・公園
桜の樹々。港では様々な荷物が船から

僧・丁稚達は羨望の目で久次郎を見る。
後藤は帽子を地面にたたきつける。

下ろされる。その様子を、切り株に座
 り眺める久次郎と沢村。
 沢村「こんな所で油売ってたら、また後藤さ
 んに叱られますよ」
 久次郎「ここは横浜。ばれやしねえ。それに
 あの馬鹿は怒鳴るしか能がねえ。ほっとけ」
 胸元から新聞を取り出す久次郎。久五
 郎はため息。
 久次郎「奉公ももう6年。いつまであんな馬
 鹿の下で働かになんねえんだ」
 沢村が見る新聞には「下関講話」の字。
 久次郎「日本はあの大国清に大勝したっての
 に俺ときたら」
 包みから団子を取り出し久次郎は食べ
 る。久次郎は沢村に団子を渡す。
 沢村「あっ。ありがとうございます」
 沢村は美味そうに食べる。
 沢村「やっぱ花より団子。ですねえ」
 久次郎「違えよ」
 沢村は不思議そうな顔。
 久次郎「花も団子も手に入れる。それが成り
 王さ」
 沢村「成り王……ですか」
 胸元から取出す王将の駒を見る久次郎。
 久次郎がふと見ると、遠くの倉庫に入
 る洋服の3人の男。真ん中の中山樵
 (28)は清国密偵1、2に連行され
 る。怪しむ久次郎。
 ○倉庫・中
 倉庫は荷物や荷袋の山。連行される中
 山は清国密偵1・2に倒される。清国
 密偵2は杖から刃を出し、中山に迫る。
 清国密偵1「(中国語)裏切り者め。死ね」
 倉庫の扉がバンと開く。来るのは久次
 郎。後ろでは怯える沢村。
 久次郎「義をみてせざるなきは勇なきなり。
 悪党共っ！きやが・・・」
 清国密偵1は瞬時に久次郎を殴打。久
 次郎は悶絶。腰をぬかす沢村。

清国密偵 1 「中国語」何者だ？」
 清国密偵 2 「中国語」まあいい。見られた
 ら消すだけ」
 中山 「中国語」この人達は関係ない！放せ」
 越の声 「中国語」待てっ！」
 越 祥応（39）が来る。越は髭と洋装。
 越 「中国語」ここは日本。勝手は許さん」
 清国密偵 1 「中国語」誰だっ！貴様っ！」
 越 「中国語」越祥応。海を駆ける商人だ」
 清国密偵 1 は刃先を越に向ける。しか
 し越は拳銃を取り出す。たじろぐ清国
 密偵達。
 越 「中国語」どうする？」
 越 2 逃げていく。越は中山に駆け寄る。
 越 「先生！ご無事でしたか！」
 中山 「ありがとうございます。ただ私よりも
 こちらの方こそ命の恩人。お礼を」
 久次郎 「ア、アンタ達何者？」
 越 「ん？ああ。これか」
 越 は拳銃の引き金をひく。旗が出る。
 拳銃はおもちや。越はおもちやを久次
 郎に投げ久次郎は慌てて受け取る。
 越 「ハッタリに気づかない。だから清国の役
 人はダメなのさ」
 笑いながら歩いていく越。
 ○高級西洋料理店
 広い店内には久次郎、沢村、越、中山
 だけ。西洋料理店には合わない大きな
 中国絵（始皇帝）が装飾。慣れないフ
 オークとナイフで食べる久次郎と沢村。
 越 「先生の危ないところを助けてもらい感謝
 しかない。今日は貸し切りだ。遠慮なく楽
 しんでくれたまえ」
 久次郎 「う、うめええ」
 顔がほころぶ久次郎。笑顔になる越。

越「私の名前は越祥応。日本に来て10年の
 沢村「し、清国？」
 久次郎「清国とは戦争があったばかり。日本
 にいて大丈夫なのですか？」
 越「国、海を越え、商売で身を起こすのが私
 の生き方。稼ぐことが正義なのだよ」
 久次郎「稼ぐことが正義・・・」
 中山「久次郎は越の言葉に感心。
 中山「それに民を苦しめる清王朝は敵。日本
 の明治維新を見習い革命を考えています」
 沢村「か、革命ですか・・・」
 久次郎「沢村はあんぐり。久次郎は中山を見る。
 中山「私の名前は逸仙・・・」
 越「先生。本名は名乗らないほうがいい。ご
 迷惑をおかけすることになる」
 中山「そうですか。では日本での名前を」
 中山「中山。中山樵です」
 久次郎「是本久次郎です。よろしくです」
 越「沢村は巨大な中国絵（始皇帝）を見る。
 越「彼が気になるかな？彼は王の中の王。
 彼を作った男こそ私が尊敬する古代中国秦
 の大商人・・・」
 久次郎「呂不韋。ですな」
 越「おおっ。よく知ってるね！」
 久次郎「十八史略が愛読書だったから」
 沢村「呂不韋？」
 越「古代中国。一介の商人だった呂不韋はあ
 る日、貧しい秦の王族、子楚と出会った」
 久次郎「呂不韋は子楚を秦の王にするため、
 全財産で子楚を援助。おかげで、子楚は秦
 王に即位しその後、子楚の息子・政
 が・・・」

越「史上初めて中華を統一した男。始皇帝と
なつた」

久次郎「子楚の死後、呂不韋は始皇帝の後援
者として、一介の商人ではありえない莫大
な富と権力を得た」

越「力がカッパをひっくり返すと出てくる
のは金貨。越の手品に驚く久次郎。」

「奇貨居くべし。将来、値が跳ね上がりそ
うな品物は、あらかじめ買っておく。呂不
韋にとつて、子楚は奇貨だったわけだ」

越「人生で勝つには、奇貨を買うことだ」
久次郎は力強くうなづく。

○港通り（夜）

久次郎「夜道を歩く久次郎と沢村。
日本で商売してる。何ちゆう豪胆さ」

沢村「でも革命なんて物騒なこと言つてまし
たけど」

久次郎「虎穴に入らずんば虎子を得ず。オレ
もあなりてえ」
久次郎の顔はたぎっている。

○商店・清正

小僧、丁稚達がせわしく働く。中に
後藤「おいつ。是本。これやっつけ」

久次郎「はい」
真面目に帳簿をつける久次郎。後藤は
沢村に近づきひそひそ声。

後藤「（小声）最近、是本が素直なんだが。
何かあったのか？」

沢村「見つけたんじゃないですか？」
後藤「見つけた？何を？」

沢村「奇貨ですよ」
清正主人「不思議がる後藤。清正主人が来る。
久次郎は手紙を受け取り開けて読む。」

清正主人「なんて？」
久次郎「戻って来いって．．．」

○線路

蒸気機関車が走る。

○鉄道の中

席に座り外を眺める久次郎は王将の駒を取り出すと口元に笑み。

○きくの家・入口

久次郎「貧しいあばらや。久次郎は声をかける。
久次郎「こんにちは――」

久次郎「しかし中から返事はない。
久次郎「留守か．．」

○大きい日本家屋・玄関

久次郎「玄関で久次郎を庄造（23）が迎える。
久次郎「ただいま」

庄造「庄造は久次郎を上から下まで見る。
庄造「大人になったな」

久次郎「兄貴は変わらねえな」
庄造「減らず口は相変わらずか」
二人は家に入っていく。

○同・居間

久次郎、庄造、善五郎（46）の三人が話す。

善五郎「長い間の丁稚修行。ご苦労だった」
久次郎「多少の銭の数え方は覚えたぜ」

不敵に笑う久次郎は、算盤を取り出し
弾くと早い。うなづく善五郎。

庄造「ウチも軌道に乗ってな。金儲け・社会
貢献。どちらも出来るということ銀行を
作った」

久次郎「銀行か。やるねえ」

善五郎「今回お前に戻ってもらったのは、銀
行の手伝いをしてもらうため。ゆくゆくは
支店を任せようかと考えている」

庄造「やってくれるな？」

久次郎「久次郎はうなずく。あの人もそう言うだろ。うしな」

善五郎「あの人？」

久次郎「……。呂不韋さ」

久次郎「茶を飲む久次郎はハツとする。」

久次郎「きくちやんと聞き黙る庄造と善五郎。」

久次郎「留守でさ。どっか行つてんの？」

善五郎「庄造は話そうとするが善五郎が止める。いて聞きなさい」

善五郎「久次郎の眉間に皺が寄る。」

善五郎「3年前なんだがな。あの子の両親は亡くなった」

善五郎「善五郎は下を向く。」

善五郎「残されたのは多くの借金」

久次郎「な、何？」

庄造「そして家族の借金返済のため、あの子は芸妓に……」

久次郎「聞いた途端久次郎は激昂。庄造の胸倉をつかむ。」

久次郎「て、てめええ！ 何で知らせなかった！」

庄造「目を逸らす庄造。」

庄造「知らせれば、お前は奉公を投げ出してただろう。そうなりや……」

久次郎「久次郎はたたみかける。」

久次郎「ウチが借金肩代わりすりやよかったじゃねえか！」

庄造「あの時は、ウチも借金まみれ。助けられなかった」

久次郎「どうしてっ！ どうしてっ！」

善五郎「庄造は胸倉を掴まれたまま苦しがる。」

善五郎「善五郎は久次郎を庄造から引き離す。」

善五郎「善五郎は久次郎を庄造から引き離す。」

庄造「頑張つてきたと思う？」

庄造「た、ただひたすら。地道、地道に血の滲む思いで家を建て直してきたんだ」

善五郎「あの子はあるの道を選んだよ」

久次郎「きくちゃんを」

庄造「久次郎。世の中、どうしようもないこともあるんだ。大人になれ」

善五郎「これで諦めがつくだろう」

○同・客間

女中「誰もいない部屋。女中が襖を開く。女中が誰もいないのを不思議がる。」

○同・居間

女中「旦那様。久次郎様がおりませんが報告。茶を飲む庄造、善五郎。襖を開き女中

庄造「まさか！」

庄造は走り出す。

○是本家の米蔵

蔵はすべて空っぽ。庄造は中を見て絶叫。

庄造「きゅ、きゅうじろおおおおお！」

○遊郭・松の間（夜）

芸妓1「ほーれ、かっぱ、この世は極楽っ！」

富代「富代（20）は笑顔で部屋に入る。」

久次郎「おおっ。スゲー美人！」

久次郎「おおっ。スゲー美人！」

富代「ありがとうございます」

久次郎「久次郎はお金の束をいくつか取り出す。」

久次郎「お次郎は。札束を投げる。」

芸妓達「お前は騒ぎ、犬の真似して札束を啜える。大笑いの久次郎だが富代は不機嫌。」

久次郎「おいっ。何、気取ってんだ？」

久次郎「札束を取り出す久次郎。」

富代「あ？」

久次郎「お前ら芸妓は錢で股も開くだろ？不幸なお前らを錢で救ってやるんだ。ホレ」

札束を富代の足元に投げつける。富代は久次郎に思い切り平手打ち。

富代「馬鹿にすりゃないよっ！」

富代「幸せ不幸せはてめえで決めんだ！ア」

芸妓「タみたいなの奴に舐められてたまるか！」

富代「やってられっか」

○同・倉庫（夜）

薄暗い倉庫。縄で縛られている富代。芸妓女将（57）が富代を棒でたたく。

芸妓女将「このバカっ！ちよっと人氣があるからって図に乗りやがって」

富代「客だからって何しても良いのかよっ。」

芸妓女将「クソ野郎」

富代「誰がっ！」

芸妓女将「富代は唾を吐く。ア」

○同・松の間（夜）

酒を飲む久次郎。ふすまが開くと入っ

てくるのは不機嫌な富代。ドスドス歩いてきてあぐら。富代が興奮して話す。

富代「あのババアが頭下げろっていうから。」

ホントはテーマみたいな。・・・」

久次郎「急に頭を下げる久次郎。」

久次郎「すまない。申し訳なかった。」

久次郎「不意を突かれる富代。酒を飲む久次郎。」

久次郎「自分で決める。・・・芸妓だ。幸せ不幸せは自分で決める。・・・」

久次郎「下を向く久次郎は肩をふるわす。」

久次郎「すまない、すまない。・・・」

富代「富代はそつと久次郎の肩に手を置く。」

富代「何かあったのかい？」

優しく久次郎の肩をなでる。富代は

「優しく久次郎の肩をなでる。」

○兜町・東京株式取引所・全景

T・8年後。明治36年（1903年）。

洋館の前。

歩くボロ着姿の久次郎（26）の腹が鳴る。

久次郎「腹減った。・・・」

久次郎「取引所の用務員が歩き拍子木を叩く。」

久次郎「そろそろか」

○同・株式取引所内部

拍子木が3回鳴る。ぎゅうぎゅう詰めの人々が株の売り買いを始める。熱気あふれるが中はゴミだらけ。

男1「売りたいだ！」

男2「買いたいだ！」

久次郎「その様子を見る久次郎。」

久次郎「相変わらず汚ねえし臭い場所だ。」

久次郎「人々に押されて倒れる久次郎。」

久次郎「久次郎は倒れる。目の前には落ちてる新聞。新聞には「ロシアトノ対立ハ不可避」の文字。鋭い顔の久次郎。」

久次郎「株はどう動くか」

久次郎 「久次郎は頭を掻く。
肩を落とす久次郎。」「

○ 亜細亜紡績・工場

紡績工場で働く労働者達。立て看板に
は「労働者は家族」の文字。久次郎は
生糸を運び働きながらぼやく。

久次郎 「何が家族だ。うさんくせえ」

労働者 監督「お聞いた労働者監督が怒る。」

でもいいんだぞ！ 文句があるなら辞め
監督は久次郎を小突く。久次郎はひょ

ろひよろ倒れる。労働者達は大笑い。
男の声「おいおい。乱暴はいかんぞ」
労働者 監督「これはこれは旦那様」

数人の取り巻きと一緒に来るのは、
越（47）。越は久次郎を見てハッと
する。

越 「あれ？ 君は・・・」

久次郎 「え、越さんっ！」
お互いビックリする。

○ カフェ

洋風の内装。久次郎と越は対面。机に
はコーヒ。久次郎はコーヒを飲むが
苦い顔。

越 「あれから8年か。時の流れは早いね」
久次郎 「越さんは？」

越 「事業が波に乗ってね。マツチ工場経営、
相場、先ほどの亜細亜紡績の株主と手広く
やらせてもらってるよ」

越 「君のコーヒを飲む。」
越 「君の方は？」

越 「成り王には成れたかな？」

久次郎 「久次郎は自分のボロ着を見て首を振る。
「もう26歳。なのにまだ何者にも成
れてませんよ」
落ち込む久次郎。腕をくむ越。」

越「世に出るのに必要なもの。それはなんだと思う？」

越「考えた。駄目。久次郎。それは能力や金ではない」

越「それは初手の大勝だ」

久次郎「初手の大勝？」

越「額く越」

越「呂不韋、ナポレオン、織田信長。彼らは皆、小勢力の頃に全てを賭けて大勝し、のし上がった。だが大抵の人間はその勝負にすら出ないで人生を終える」

越「真剣なまなざしの越」

越「全てを賭けて勝負に出る。これが重要なのだよ」

越「コーヒーを飲む越」

越「君はどうしたいのかね？」

越「問い詰められ言葉に窮する久次郎」

○貧乏長屋

ボロボロの部屋。久次郎は寝転んで考える。富代（28）が部屋を見ながら入る。

富代「あいかわらずひどい暮らしねえ」

富代「久次郎の腹が鳴る」

富代「ろくなものを食べてないんだろ。ほれ」

富代「富代は煮物を久次郎に渡す」

久次郎「わるいな。この恩はいつか返す」

富代「あら、どんな？」

久次郎「お妾第一号にしてやる」

富代「正妻じゃないのかい？」

富代「笑う富代。久次郎は王将の駒を取り出し見る」

久次郎「妾は男の甲斐性。妾も作れん男と一緒に」

緒になるのはつまらんぜ」

富代「これでもね。『一緒にならう』って言う」

富代「これでもね。『一緒にならう』って言う」

富代「これでもね。『一緒にならう』って言う」

久次郎「いまにオレは大物になる。待ってる」

富代「そう言うって何年経った？」

富代「溜息をつく富代。決意の顔の久次郎」

○是本銀行・越谷本店・全景

○同・入口

紳士が出て行く。庄造（31）が丁寧に辞儀。入れ替わりに入る久次郎。庄造は笑顔だが、久次郎の顔を見て驚愕。

久次郎「ひさしぶりだな」

庄造は無視。

久次郎「おいおい。弟が訪ねてきたんだぜ」

庄造「ウチには弟なぞおりません」

庄造は奥の部屋に入ってしまう。

久次郎「兄貴。東京に支店を出せ。その話があつて来た」

戻る庄造。手には桶。中は大量の塩。

庄造「テメエが米を売り払ったせいで。オレと叔父さんがどれだけ苦労したか！」

庄造は塩を久次郎にぶちまける。怒る

久次郎。

久次郎「謝ってんだろうが、クソ兄貴っ！」

庄造「それが謝る態度か！」

敷居をまたごととする久次郎。

庄造「またぐなよっ！」

久次郎は敷居をまたぐ。

庄造「またぎやがった！強盗だああああ！だれかああああ」

慌てて逃げていく久次郎。

○同・銀行前

照り返す太陽。蝉の声。久次郎は汗まみれで店の前でゴザを敷きあぐら。ひ

そひそと話す町の人。

使用人「旦那様。久次郎様が・・・」

庄造「ほっとけ。そのうちどつかにいく」

○同・銀行前

雨が降る。ゴザの上にあぐらの久次郎。びしょ濡れ。久次郎は大声で叫ぶ。

久次郎「大事なものは努力じゃねえ。時流に乗ることだ！東京に出にや時勢に乗り遅れ

るぞ！

銀行の窓から久次郎を見つめる庄造。
カ―テンを閉める庄造。

○同・銀行前

雪が降り積もる。ゴザにあぐらで髭も
じやの久次郎。行く人々が憐れんで久

久次郎「東京支店を作れ！オレに任せろ！」

庄造「東京支店案。悪くはない」

庄造「喜ぶ久次郎。だが庄造は陰しい顔。

庄造「が、誰がお前みたいな穀潰しに任せ
る？」

久次郎「……待ってる」

○同・銀行入口

久次郎に引きずられる沢村（23）。
銀行入口では庄造がその様子を見て唾

沢村「せ、先輩。こんな所に連れてきて話っ
て何ですか！明日、大事な取引が！」

久次郎「こいつの名前は沢村謙吉。清正でも
拔群の才の持ち主だった」

庄造「噂にはきいている。優秀だとか」

久次郎「東京支店の金庫番。こいつはどう
だ？」

沢村「はあ、いいいい？き、聞いてないです
よ、先輩！」

久次郎「そりやそうだ。今、話した」

久次郎「お前はあんな店の器じゃねえ。とっ
と辞めてデカイ世界に出るんだよ！」

庄造「久次郎は赤面。庄造は沢村の顔を見た後、
今度こそ本気か？」

庄造「地道にやれ。それが条件だ」
 次郎。啞然としたままの沢村。

○大韓帝国・仁川沖
 T・明治37年（1904年）2月9

日。
 停泊しているロシア軍艦。日本の艦隊
 の攻撃を受けて巡洋艦ワリヤーグ砲艦
 コレーツが爆破。

○街

新聞屋「行き交う人々。大声で走る新聞屋。」

新聞屋「新聞屋の声に振り向く人々。」
 騒ぐ人々は新聞を買おうと群がる。

○芸妓屋

富代「久次郎は富代に膝枕をしてもらって
 いる。だが久次郎の顔は真剣。」
 久次郎「ロシアは最強国。清のようにはいか
 ん」

久次郎「起き上がる久次郎。」
 領に。日本人は追放され札幌はニコライブ
 ルクとでも変えられ、下手すりや日本
 は・・・富代は不安な顔。

久次郎「この戦争で日本の百年が決まる。な
 らオレも」

富代「オレも？」
 久次郎「この戦争で成り王に成る」

王将の駒を取り出し強く握る久次郎。
 王将の駒に気づく富代はため息。
 富代「ソレ。例のきくちゃんやらにもらっ
 たヤツ？」

久次郎は黙って王将の駒を見つめる。

富代「とつくに誰かに身請けされてるって」

富代「忘れちまいな。その方が楽になれるよ」

久次郎「王将の駒をしまう久次郎。久次郎「上海、ロンドンに行くことになった」

富代「富代は淋しそうな顔。」

久次郎「どうしてそんな遠い・・・」

久次郎「戦争は長期戦になりそうだ。商人が稼いでこそ国も豊かになる。そのため英語を学び伝手を作ってくる」

久次郎「久次郎は富代の手をにぎる。」

久次郎「もう少しだけ待て。勝ったら何でも買ってやる」

富代「富代は諦めた顔。富代「もう待つのは慣れたよ」

○ 港

Ｔ・明治 3 7 年（1 9 0 4 年） 1 1 月 4 日。

大きな船が汽笛を鳴らす。出港する船。

○ 船上

船上には駒場亮一（5 5）と滝田市郎（4 2）。駒場は船員に激怒。

駒場「一等客席が満員？ 俺を誰だと思っている！」

船員「申し訳ございません」

滝田「駒場をなだめる滝田。滝田「社長。今日のところは二等客席で」

駒場「駒場は滝田を蹴り飛ばす。駒場「何とかしろ！」

沢村「その様子を遠目で眺める久次郎と沢村。沢村「あれが製糖業界一位の桜製糖の駒場社長です」

久次郎「馬鹿殿に仕える家臣は大変だな」

○ 上海・イギリス租界

○ 同・マセソン商会・全景
西洋建築物。ユニオンジャックが翻る。

○同・内部

イギリス人、弁髪の清国人の案内で、中を見学する久次郎達日本人一行。

○マセソン商会・砂糖取引所

横柄に案内をするマセソン商会イギリス人店員。日本人一行はその案内を聞く。マセソン商会社員にヘコヘコする駒場。

沢村「駒場社長が、あんなに頭を下げちゃつて」

久次郎「ここで取引できなきゃ、桜製糖はやってけねえ。マセソン商会の凄さだ」

遠目で駒場を見る久次郎と沢村。偉そうにマセソン商会社員。

久次郎「日本人を舐めてやがる」

久次郎と沢村は商品の瓶詰の砂糖を見る。久次郎は瓶詰め砂糖を勝手に開けてなめる。注意する店員に、紙幣を渡す久次郎。舌打ちして去る店員。

久次郎「が品質は一流。日本の会社じゃ歯が立たん」

沢村「なのに日本の精糖会社は潰し合いばかり」

久次郎「小競り合いで真の外敵に気づかない。今の日本の経済界がこうだ」

腕を組む久次郎。

久次郎「外国と戦うには、強い王が日本の製糖界。いや経済界を一つにしなければ」

や・・・
外のユニオンジャックを見る久次郎。

○上海・日本料亭

日本人商人一行が飲み会。盛り上がる。久次郎がふんどし一丁で踊る。さらに盛り上がる場。それを見る駒場と牟田

牟田「ずいぶんと賑やかな男ですな」

駒場「フンツ。あの手の輩はどうせ馬鹿騒ぎしか能が無いヤツですよ」

○ホテル
 沢村「先輩！ た、大変ですっ！」
 久次郎「さわぐな。昨日、飲み過ぎで」
 沢村「すごいことがっ！」
 久次郎「新聞を受け取る久次郎。新聞は英字。慢してんのか」
 沢村「ち、違います！ ここです、ここ」
 沢村「沢村は真剣な顔で新聞を読む。」
 沢村「most important fort is occupied。二百三高地の陥落ですっ！」
 久次郎「な、なんだと！」
 沢村「ただ続きが・・・」
 久次郎「読んでみる」
 沢村「世界最強のバルチック艦隊。その数十隻。アフリカ南端をまわりすでにシンガポールまで到着。日本は・・・」
 久次郎「久次郎は急ぎ替える。」
 沢村「ど、どうするんですか？」
 ○是本銀行・社長室
 庄造「銀行の社長室。庄造が帳簿を確認。庄造は茶を飲む。突如開く扉。入ってくる久次郎と沢村。茶を吹き出す庄造。」
 庄造「お、お前、ロンドンに行ったんじゃ！」
 庄造「また変な見起こしたんじゃ！」
 久次郎「新聞を庄造の顔に突きつける久次郎。急存亡の時。だから、帰ってきた」
 庄造「だからといって軍人でもない我々に何が……」
 久次郎「国は日露戦争という大博打を打っている。だったらオレらも大博打を打つぞ！」
 庄造「博打？」

久次郎「株だ！」

久次郎「庄造はぐりと唾を飲む。」

久次郎「三菱、三井、安田。奴らは維新、西
南戦争で富を作った。オレ等もこの戦争で
富を作る。ありったけの株をかうんだ」

庄造「な、何を言っとるんだああ！ か、株
だと？ 出来るわけ……」

久次郎「歴史を見る！ フィンランド。ポーラ
ンド。トルコ。ロシアに負けた国は全てを
奪われた。負ければ全てロシアに奪われる
ぞ」

庄造は言葉に詰まる。

久次郎「戦争とはそういうもんだ。覚悟を決
める」

○帳簿室

そろばんを弾く久次郎とその様子を見
る善五郎、沢村、庄造。

庄造「なあ。もう一度考え直さないか？」

手を出す久次郎。とまどいながら庄造
は帳簿を渡す。

久次郎「ウチの資産は全部で20万円か」

笑顔になる久次郎。

久次郎「おめえがいない間にこつこつ頑張った
んだよ！」

庄造は久次郎を怒る。

久次郎「ちなみに銀行の資産は？」

善五郎「きゅ、久次郎？ お前まさか、銀行
預金にまで？」

庄造「バカ久！ やりすぎだ！」

久次郎「勝つか負けるか。負けたら銀行は破
産だぞ」

庄造は重い口を開く。

庄造「は、80万円……」

久次郎「全部で、百万円か」

久次郎「久次郎は新聞を読み話をはじめる。」

久次郎「流れの株を買う」

沢村「流れ？」
 久次郎「製糖株、紡績株、鉄道株、東京株式
 取引所株。ありったけ。一万株ほどだ」
 善五郎「きゅ、久次郎。も、もう一度。もう
 一度考え直さんか？」
 久次郎「弱気は禁物だ。株の世界は一瞬が勝
 敗を分ける」
 庄造はめまいを起こし倒れる。
 ○東京株式取引所
 手ごった返す人々。和服姿の男たちが右
 手。久次郎「買い。買い。買いだ。売りの声。
 だ。ただ一人、洋服姿の久次郎は左手を挙
 げて手の甲を見せる。
 ○亜細亜紡績・工場
 紡績工場。労働者達。牟田が労働
 者。牟田「君たち、一人一人の働きが日本のため
 になる。がんばってくれ」
 笑顔の労働者達。洋装の越が現れる。
 帽子を取り挨拶をする越。
 × × ×
 工場を回り歩く越と牟田。
 越「亜細亜紡績は戦争のあおりは受けず安定
 していますな」
 牟田「これも大株主の越さんのおかげ。た
 だ、新聞を読む牟田。
 牟田「最近、正体不明の相場師が、とんでも
 ない額の株を買いまくってるみたいで」
 越「正体不明の相場師？」
 牟田「ええ。まあ気にかけるほどはないとは思
 います」
 ○日本海
 T・明治38年（1905年）5月2

7 日。天気晴朗ナレドモ波高シ。皇国
ノ興廃コノ一戦ニアリ。各員奮励努力
セヨ。
日本海海上で連合艦隊とバルチック艦
隊の砲撃が開始。

○東京駅

狂喜乱舞する人々。街には多くの日章
旗。老若男女は万歳。凱旋する兵隊達。
人々「万歳！バンザイ！」
人々「日本勝った、ロシア負けた。日本勝っ
た、ロシア負けた！」
人々は日章旗と万歳で兵隊を迎える。

○宴会場（夜）

畳の宴会場。銀行員達が宴会。善五郎、
庄造「日本も勝った。株価も上がる！」
善五郎「我が社のますますの発展を祝って」
全員「乾杯！」
皆、杯を飲み干す。周りを見る善五郎。
善五郎「久次郎はどうした？」
庄造「どっかほつつき歩いてるんですよ。放
っておきましょう」

○街・裏路地（夜）

暗い裏路地。街灯ランプが照らす。久
次郎は探偵と話す。
探偵「旦那。申し訳ない。やっぱりきくとい
う女性は見つかりませんでした」
久次郎「そうか。・。ご苦労だった」
久次郎は探偵に金を握らせる。探偵は
去る。久次郎の視界に片足が無い兵士
が松葉杖で歩くのが見える。兵士に近
づきお辞儀をする久次郎。
久次郎「あなたの方のおかげで日本は勝てた。
少ないですが」
久次郎はお札を 10 枚ほど兵士に渡す。
が片足のない兵士は淋しそうに、お札
を返す。

兵士「……」。戦死した仲間は二度と
 帰ってこない。俺はいい。死んだ戦友の家
 族にあげてくれ。――」
 久次郎に住所の書かれた紙を渡し、足
 を引き去る兵士。

○日比谷公園
 T・明治38年（1905年）9月5
 日。

晴れた秋空。久次郎と富代は歩く。

富代「良い天気だねえ」

富代「で、話って何だい？」

久次郎「今回の戦勝でな。日本は長年の不平
 等条約も無くなり一等国になる。おそらく
 な」

富代「富代は苦笑い。
 久次郎は遠い目。」

久次郎「ただな。一将功なりて万骨枯る。勝
 利の下には戦死した十万もの兵士たちがい
 る。そう思うとなんだかな」

富代「富代は暖かい眼差しで久次郎を見る。
 富代「アタシ。アンタのそういうとこ。嫌い
 じゃないよ」

久次郎「久次郎は封筒を取り出す。
 久次郎「うちも株でもうけた。今までの借り
 だ。やっと返せる」

富代「いぶかしげな顔の富代。
 富代「いいよ、こんなの。アンタのことだか
 らまたいつ落ちぶれるか」

久次郎「久次郎は富代に封筒を握らせる。
 久次郎「とりあえず受け取れ」

久次郎「はにかんで下を向く久次郎。
 久次郎「まあもしだ。もしお前がこれからも
 欲しいならあげてやってもいい……」

富代「不思議そうな顔の富代。
 富代「何のこと？」

久次郎「頭をかき怒る久次郎。
 久次郎「だからっ！俺と一緒に……」

突然、怒号と悲鳴が聞こえてくる。
 群衆の声「弱腰政府を叩き潰せ！」
 群衆の声「講和を認めるな——！」
 群衆が見える。大群衆の勢いは怒り爆発。
 群衆の声「賠償金を払わせろっ！ロシアを
 痛めつけろ！」
 警察官達が出動し、群衆を止めようと
 するが、勢いに負けて逃走。群衆は打
 ち壊しを開始。怯える富代。
 久次郎「只事じゃない。逃げるぞ」
 久次郎は富代の手を引き二人で走る。
 ○是本銀行東京支店・会議室（夜）
 久次郎、庄造、善五郎、沢村、幹部達
 で会議。
 久次郎「大変なことが起きた。日比谷で焼き
 討ちだ。群衆が暴れて手がつけられなくな
 ってる」
 沢村「なぜ？」
 久次郎「戦争は終わった。が、ポーツマスで
 の講和。賠償金も取れず、樺太の南半分を
 得ただけ。それに国民の不満が爆発した」
 沢村「賠償金がないなんて」
 善五郎「日本の国力は限界。しかしロシアは
 余力を残している。賠償金がないのも仕方
 あるまい」
 沢村「なら戦死者はなんのために……」
 庄造「逆に言うなら勝った国が儲かるかぎり
 戦争は無くない。永遠にな」
 行員「バタンと扉が開き行員が入ってくる。
 行員「し、支店長。た、大変です！」
 久次郎「会議中だぞっ！」
 行員「怒鳴る久次郎。が行員は新聞を読む。
 行員「暴動で株価がつ。株価が大暴落です！」
 久次郎「久次郎は新聞を奪って読む。
 全部、暴落だっ！クソッ！」
 久次郎「製糖株、紡績株、鉄道株、日東株。
 そろばんを弾く久次郎。」

沢村「先輩っ！　しかもここっ！」

久次郎「場買イデ百万円ノ大損」の文字。　是本銀行・相
 やがったんだ！」

預金者達の声「金はどうなっただーっ！」

善五郎「とりつけ騒ぎだっ」

久次郎「全員が慌てるが久次郎が宥める。
 オレと兄貴は東京支店の騒ぎを抑えるんだ」

庄造「どうするんだっ！　株を買ったせいで
 現金が無いんだぞっ」

久次郎「考えがある」

○是本銀行・東京支店前（夜）

入口には取り付け騒ぎの預金者達。松
 明を持ち、殺気立っている。

預金者 1「金——っ！」

大きな金庫を乗せた台車を引いて悠々
 と来る久次郎。緊張気味の庄造。庄造
 の手には暗闇に光る大きな提灯。預金
 者 1 は久次郎に詰め寄る。

預金者 1「俺の預金っ！　300円はっ！」

久次郎「300円ですね」

久次郎はお札を数える。その様子を見
 る預金者達。

久次郎「どうぞ」

預金者 1「預金者 1 は落ち着く。
 久次郎は大声で預金者達に叫ぶ。
 久次郎「皆様。ご安心を！　是本銀行はいつ
 でも必要なお金をおお支払います！」

提灯には「夜中もお支払います！」

す」の文字。預金者達は落ち着き去る。

○同・社長室

金庫の中の札束を庄造が取ると一枚目

庄造「以外はほぼ白紙。

久次郎「さしあたり必要なのは？」

庄造「80万円。だがそんな金……」

庄造「お前が株にしなけりや……」

久次郎「……」

走る久次郎。

○山田銀行・社長室

頭を下げる久次郎。困った顔の山田銀行頭取。

久次郎「どうかっ！ どうかっ！ すぐに返せます。現金を貸していただきたい」

山田銀行社長は首を振る。

○上田銀行

頭を深々と下げる庄造。首を振る上田銀行頭取。

○是本銀行・越谷本店

電話をする沢村。

沢村「先輩っ！ 支店の預金が見るみる減つて。このままじゃ……」

○野田商店・社長室

頭を下げる久次郎。初代野田徳兵衛（50）と二代目野田徳兵衛（28）が対応。

久次郎「野田さん。どうか。どうか現金を」

首を振ろうとする初代。だが二代目が初代を抑える。

二代目野田「是本さん。貸しましょう」

二代目野田「ただ10万円しか出せません。それでもよろしいですか？」

久次郎「もちろん。貸してもらえただけでも感謝です！ 何とお礼を言ったらいいか」

にこりと笑う二代目野田。

○野田商店・社長室・窓際
 初代野田「よいのか？ 10万円もの金」
 二代目野田「あの男。これで終わる男ではありません。ここで恩を売っておくのも一策」
 フツと笑う二代目野田。

○道（夜）
 久次郎「人気の無い道を走る久次郎。物陰から現れる暴漢。暴漢は久次郎の行手をさえぎる。」
 久次郎「なんだ。お前。オレは忙しいんだっ」
 暴漢「是本だな」
 暴漢「新聞を取り出す暴漢。」
 久次郎「おっ。おいおい。そんな新聞、嘘ばっか。」
 暴漢「天誅————」
 短刀で暴漢に刺される久次郎。倒れる
 久次郎「こ、こんなところで……」
 久次郎「血まみれで倒れる久次郎。」
 久次郎「銭。銭を集めなきゃ……」
 若い女性が走ってくる。意識が朦朧とする久次郎。おぼろげな声。
 若い女性「い、今お医者様を」
 久次郎「久次郎は女性の顔と声で反応。」
 久次郎「き、きくちゃん……？」
 久次郎は意識を失う。若い女性は走っていく。

○大病院・個室
 ベットで寝てる久次郎。隣には医者。ガバツと起きる久次郎。久次郎は慌ててキョロキョロ。
 久次郎「どこだっ。ここはっ。早く金を……」
 久次郎は腹を押さえる。
 医者「動いてはいけません。ここは病院。あ

なたは刺されたんですよー
 久次郎「ハッと思ひ出す久次郎。
 来て・・・。さうだ。裏通りで変な奴に襲わ
 医者「通りがかりの女性が助けてくれたんで
 す。人気が無い道。気づかれなければ死ん
 でましたぞ」
 久次郎「そ、その女性は何？ お礼がしたい」
 医者「名乗らずに去っていったそうです」
 久次郎「そうですか・・・」
 久次郎「お守りを取り出す。刃物で切
 られたお守りの中には血がついた王将
 の駒。扉が開き庄造がくる。」
 庄造「久次郎っ！ 無事だったかっ！」
 久次郎「兄貴か。これが守ってくれたよ」
 王将の駒を見せる久次郎。久次郎は話
 を変える。
 久次郎「それより兄貴。錢だ。10万円はか
 き集めた。だがまだ足りねえ！」
 庄造「落着け。久次郎」
 久次郎「落着け？ 錢が足らんだぞ！」
 新聞を置く庄造。
 庄造「見ろ」
 久次郎「こ、これはっ」
 新聞をみて驚く久次郎。
 久次郎「株価が跳ね上がったる？」
 庄造「今回の戦争。確かに日本は賠償金を取
 れなかった。だが日本は金以上のものを得
 た」
 久次郎「錢以上のもの？ 一体・・・」
 庄造「信用だ」
 庄造「庄造の話聞く久次郎。
 庄造「大口ロシアに勝ったという信用」
 庄造「この戦勝で欧州各国が日本を信用し外
 資が入る。これは何十億、何百億の利益に
 匹敵する。賠償金とは比較にならない程の
 な」
 久次郎の肩をぐっとつかむ庄造。

庄造「銀行も大儲けできた。久次郎。お前のおかげだ」

○是本銀行・社長室

札束の山。抱きかかえる久次郎。それを見る庄造、善五郎、沢村。札束の山をばらまく久次郎。

久次郎「だ——はっはっは。愛しいお前たち。離さんぞおおお！」

腹を抑える久次郎。

久次郎「痛ててっ」
庄造と善五郎はあきれた顔。沢村は苦笑い。

○渋谷邸

広大な敷地に様々な建物。屋外の広大な庭園で開かれるパーティ。渋谷栄一、大隈重信、犬養毅、桂太郎が談笑。晴天で雲一つない青空。

沢村「大隈公に渋谷公。それに犬養さん。桂さん。こんなところに呼んでもらえるなんて」

久次郎「銭の力さ」

沢村「僕、先輩についてきて大正解でした」
沢村は喜び久次郎の腕にしがみつく。

久次郎「だろ？」

久次郎は得意げ。大隈が近づく。

沢村「（小声）せ、先輩！あの方はっ！」

大隈は大声で自己紹介をする。

大隈「我輩は東京専門学校長大隈重信だ！」

久次郎「是本久次郎です」

大隈はじつと久次郎を見た後、一言。

大隈「名は聞いている。大層な相場師だとか」

大隈は目を細める。

大隈「お前は、何のために相場をやる？」

久次郎「成り王に。日本一の大金持ちになり

たいです」

大隈「そうか。・・・。悪くはない。が」

大隈「己の利益だけを考えるな。世のためを

考える。それがお前を大きくする」
 久次郎「はっ」
 大隈「あと財産は現金、土地、株。この三つに分けておけ。金持ちはみなやっている。助言だ」
 久次郎はうなづく。大隈は去る。
 × × ×
 青空が曇り始める。
 久次郎「曇ってきやがった」
 中山の声「兜町の風雲児とはあなたのことでしたか」
 久次郎が振り返ると中山（38）。
 久次郎「中山さん！ お元気でしたか？」
 中山「喜ぶ久次郎。中山はひそひそ声。が、革命未だ成らず。道は遠いです」
 久次郎「そうですね」
 中山「こんな豪勢な会に呼んでもらい有難い。だが祖国の苦しむ民を思うと、こぶしを握る。その様子をじっと見る久次郎。
 越の声「これは是本君。久しぶりだね」
 久次郎「おお。お久しぶりです」
 越「はいぶ・・・。変わったね。風格というか、威厳がついた、よ」
 久次郎はふっと笑い一礼。越は目つきが鋭くなる。
 越「今回の相場。だいぶ儲けたようだが」
 久次郎「初手の大勝。オレもしました」
 越「桶狭間に勝ったわけか」
 久次郎「桶狭間では終わりません。稲葉山、姉川、長篠、天目山と勝ち続けます」
 越「凄い自信だ」
 久次郎「自信が無ければ始まりませんよ。勝負は」
 越「負は」
 越「実は私も日本に帰化してね。ついに日本」

人になつた」

久次郎「清国に未練は無かつたのですか？」

越「それを上回る大切な人に出会つた。紹介しよう」

越「はうれしそうな顔。」

越「きく。来なさい」

越「極上の女だ」

きくは久次郎の顔を見た後、ゆつくりとお辞儀。越は久次郎の様子に気づかず話を続ける。

越「高級店で知り合つてね。僕が一方的に惚れたわけだ」

越「日本女性には繊細で美しい。きくはその中でも飛び抜けている」

越「金さえあれば、いくらでも女を手に入れられる。大切にしたい。守つてやれる」

越「失礼！ のろけがひどかつたな。ははは」

久次郎の様子に周りは気づかず談笑。

越「一旦屋内に戻ろう」

急ぐ越達。一人残され濡れる久次郎。

○同・着替え室

外では雷雨。狭い居間。びしょ濡れのきくが髪を拭く。和服を着替えようとするが、襖越しに声が聞こえる。

久次郎の声「きくちゃんだよね？」

きく「きく、久ちゃん。・・・」

久次郎の声「一目で分かつた。会いたかつた」

久次郎「この前、助けてくれたのは君だったんだよね。お礼が言いたくて」

きく「助けたのが久ちゃんって病院で知つて。驚いちゃつた。無事で良かった」

久次郎の声「元氣だったかい？」

きく「久ちゃんは今？」
 久次郎「そう。よかった」
 きく「久次郎の声。きくちゃん！ 謝りたい事が！」
 久次郎「君を助けなかった！ オレも奉公に出て家にお金もなくて。それでそれで・・・」
 言葉が詰まる久次郎。きくは首をふる。
 きく「久次郎は悪くない」
 久次郎「まさか越さんの妾・・・世話になつてたなんて」
 きく「・・・」
 久次郎「ただオレもやっと金ができた。だから、だからオレと一緒に・・・」
 きく「久ちゃん」
 きく「きくは一呼吸する。
 てくれるの。歳も離れていても大切にしてくれるわ。けど、それでも大切にしてくれるの」
 きく「だから久ちゃん。私のことは心配しないで。久次郎も幸せになつてね」
 きくは襖を開けると久次郎の手を握る。手を放し襖を閉めるときは去る。
 ○春風楼・春の間
 外は豪雨。琴の稽古をする富代。ずぶ濡れの久次郎がくる。
 富代「あら。久しぶり・・・」
 富代「富代は久次郎の姿を見て驚く。
 富代「つてあんた、ずぶ濡れじゃない！ はやく着替えないと・・・」
 富代「久次郎は富代に抱きつく。
 富代「ちよ、ちよっと・・・」
 富代「な、なに・・・」
 久次郎「黙って抱かれる。銭ならいくらでも・・・」

久次郎は札束を投げる。富代はとまどいながらも、久次郎を受け入れる。

○豪邸・風月花壇（夜）
大庭園のある大邸宅。

○同・鳳凰の間（夜）

久次郎は広々とした畳の部屋で一人飲む。誰もいない。目がすわっている。久次郎「全てを……手に入れる」久次郎は酒瓶を思い切り投げつける。バリんと割れる酒瓶。何本も何本も投げては割り続ける。

○証券会社・丸藤・大広間
50人ほどの社員達が整列。前に立つのは久次郎。

久次郎「今日より設立した証券会社『丸藤』だ。皆、俺の指示に従うように」

久次郎「さて。諸君。質問だ」

久次郎「久次郎はにこりと笑う。」

久次郎「この中で、錢より大切なものがあるヤツはいるか？」

久次郎「とまどう社員達。」

久次郎「遠慮はいらん。さあ」

久次郎「とまどいながら2、3人が手をあげる。久次郎は1人に質問。」

社員1「家族です」

社員2「笑顔で頷く久次郎はもう一人を指さす。『将来を決めた女がいます』」

久次郎「照れくさそうに話す社員2。」

久次郎「社員1、2は驚く。」

久次郎「社員1、2は去れ」

久次郎「とまどう社員1、2。久次郎は怒鳴る。」

久次郎「社員1、2は泣きそうになりながら去って行く。久次郎は再度、演説。」

久次郎「皆、よく聞け」

久次郎「久次郎は 50 人の中を歩き始める。」

久次郎「日本はロシアに勝ち一等国となった。もうアジアの日本では無い。世界の日本だ」

久次郎「人差し指を上げる久次郎。俺も銭が好

きた。なぜなら銭は世界を変えられる。俺

は今回の戦争でボロ儲けした。そして世界

が変わった！」

久次郎「大声で叫ぶ久次郎。」

株。俺と世界を取るぞっ！ありとあらゆる株。まずは日本中の株を買い占めろっ！」

久次郎「俺は大量の札束を金庫から取り出すとそれを社員達にめがけて上からばらまく。」

久次郎「手柄立てたヤツにはいくらでも褒美

を出すぞおお」

社員一同「うおおおおおお！」

○風月花壇（夜）

中山が入口まで来ると芸者が現れる。

芸者「どうぞ」

中山は進む。

○同・大広間（夜）

久次郎「久次郎が一人飲む。襖を開き入る中山。」

久次郎「ようこそ」

中山「是本さん。今日は一体・・・」

久次郎「昔話でも」

一人笑う久次郎と戸惑う中山。

久次郎「というのは冗談で。率直なところ、

どうですか？」

中山「何がですか？」

久次郎「革命ですよ」

警戒する中山。久次郎「安心してください。清国政府に頼ま

れて日本政府がアナタを警戒しても、俺はアナタを支持してる」

久次郎は風呂敷を中山の前に出す。開くと中は日本円の札束の山。

久次郎「あまり綺麗な錢じゃないけどね。俺はアナタの呂不韋になりたい」

久次郎「く謝る久次郎。わざとらしくゴクリとつばを飲む中山。わざとらしく自分の頭をポンと叩く久次郎。」

久次郎「足りなかったですか？」

久次郎「押し入れを開けると風呂敷の山。風呂敷を開けると金ゴツト。」

久次郎「革命資金にどうぞ」

中山「し、しかし。このようない施し。これは投資です」

久次郎「だ、だが。これは投資です」

中山「理想とはかけ離れて」

久次郎「中山を睨む久次郎。」

久次郎「前に何より錢。正義をするには錢がいる。その自覚が無いと荒野で野垂れ死ぬぜ」

久次郎「くる音。入ってくるのは越。」

越「一体どういうことだ？」

久次郎「越は越を睨みつける。」

越「清国の問題に勝手をされては困るっ！」

越「先生。さあ。帰りましょう」

久次郎「その手を久次郎は引き離し越を睨む。」

久次郎「んだろ？ だつたらゴタゴタぬかすな」

久次郎「久次郎の態度に啞然とする越。」

久次郎「腐敗した清が倒れりや、生まれ変わった中国と日本が手を結ぶ。西洋の魔の手からアジアを守る。最高じゃねえのか？」

中山「に、日本が西洋覇道の狗となり、あらたな魔の手になる可能性は？」

久次郎「魔の手になる可能性は？」

中山「その力がありで？」

久次郎「久次郎は立ち上がり越を睨み越に語る。」

久次郎「呂不韋は俺だ。消えろ」
越はキツと久次郎を睨み、部屋を出る

○桜製糖・社長室

洋風の部屋。ソファに寝っ転がる駒場。
隣に立つ滝田。ソファに寝っ転がる駒場。

滝田「社長。また手紙が」
隣に立つ滝田。ソファに寝っ転がる駒場。

駒場「何が製糖業界の連合だっ！ウチとイ
ギリスの繋がりを羨む小者どもがっ」

滝田「しかし社長。我が社もいつまでもイギ
リスの傘下にいるのではなく、日本の製糖
を盛り上げるのも……」

駒場「駒場はお茶を滝田にぶっかける。」

駒場「お前如きに何が分かるっ！」

滝田「立ち上がってドスドス歩く駒場。」

駒場「コレと温泉だ」

駒場は小指を上げ部屋を出る。ため息
をつく滝田。

○同・入口

滝田が帰るところ。離れた所から久次
郎と沢村がひそひそ話。

沢村「あれが桜製糖の諸葛孔明。滝田市長さ
んですか」

久次郎「久次郎と沢村は滝田に近づく。」

久次郎「滝田市長様ですね。私、是本久次郎
と申します」

滝田「振り返る滝田。笑顔の久次郎。
あなた、噂の……」

○風月花壇・鳳凰の間（夜）

大広間に30人の芸者が楽器演奏に踊
り。美しい芸者が滝田に酌。驚く滝田。

滝田「是本さん。他の方は？」

久次郎「お客はあなただけです」

滝田「わ、私のためにこんな豪華な宴会を？」

久次郎「その思っているのは、あなたとあなた
 の勤める桜製糖だけ」
 久次郎「笑顔の久次郎。話が分からない滝田、
 私、証券会社を作りましてね。あなたに仲
 間になってもらいたいのです」
 沢村「滝田さん。あなたの経営改革のおかげ
 で桜製糖は業界一位の会社となった。が、
 所詮、あなたは雇い人」
 久次郎「上にいる人間は財閥で貴族。おまけ
 に社長は馬鹿殿。優秀なあなたを安くこき
 使ってるだけです」
 久次郎「狼狽する滝田。久次郎は酒を注ぐ。
 久次郎「ささっ。男らしく」
 滝田はくいと飲む。
 × × ×
 芸者が滝田に寄り添う。膳には空のお
 猪口が 10 本以上。滝田は泥酔。
 久次郎「しかし月給取りほど馬鹿らしいもの
 はないですな。あれは無能のすることです」
 滝田「それは働く人への侮辱ですぞっ！」
 久次郎「違うね。有能は己の足で歩く。他人
 に使われている限り無能に過ぎない」
 久次郎「久次郎は人差し指を振る。
 月給取りで恥ずかしいのではないのですか？
 当に今の地位で満足ですか？」
 滝田「ハッとして下を向く滝田。
 滝田「私は……」
 滝田「再度、ぐいっと酒を飲む滝田。
 滝田「私は日本の製糖業界をイギリス依存か
 ら脱却させ世界と戦えるようにしたいので
 す」
 滝田「久次郎の目は鋭くなる
 沢村「その社長は日本の製糖会社の連合が必要。
 久次郎「頭の古いバカ社長。能無し部下の尻ぬ
 ぐい。あなたの夢も今のままでは」

滝田「私もっ！私も勝負に出たい！！」
 久次郎「私もっ！私も勝負に出たい！！」
 沢村「手付金です。どうぞ」
 久次郎「仲間になってくれますね？」
 滝田は札束を前に震える。
 ○東京株式取引所
 ぎった返す人々が株の売買。ゴミだらけの取引所。ボタンと扉が開き久次郎が来る。皆、久次郎を見ると静まり返る。
 投資家「（小声）あれが噂の・・・」
 久次郎「汚ねえ取引所だっ！お前ら変えたくねえか？」
 皆が驚き頷く。にやりと笑う久次郎。
 ○洋館・会議室
 久次郎「議。駒場は不機嫌。久次郎「さて今日の有志会。提案は、東京株式取引所の増資だが・・・」
 久次郎「いくらを考えている？」
 役員「1200万円！」
 駒場「そんな金っ！今のままで良いのに何を考えてる！」
 久次郎「首を振る久次郎。久次郎「頭が古い。日露戦争後の日本は世界が投資に出来ない」
 駒場「そんな金があるか！確かに今、景気は良い。だが必ず反動がくる。ワシは日清戦争後に苦い思いをしたんだ」
 久次郎「私の意見に反対は？」
 久次郎「私の意見に反対は？」

皆、久次郎の顔を見て手を挙げず。駒場だけが手を挙げる。

久次郎「みんな賛成ですが？」

駒場「……青二才が」

久次郎「（小声）あんなのが精糖界の大將じや日本の将来も危ういな」

○東京株式取引所

ゴミ一つ無くきれいな取引所。「自動表示器」が設置。驚く投資家。

投資家 1「相場があつという間に分かる！」

投資家 2「是久將軍の増資のおかげだ」

投資家 1「是久様様だな」
ボタン一つで相場が現れる。

○新聞印刷所

印刷される新聞。「是本久次郎。東京株式取引所買収。施設ハ近代的施設ニ変貌」の文字。

○春風楼（夜）

富代「是久將軍。富代の隣。富代は新聞を読む。富代は是久將軍。深川の芸者を買占め。ねえ」

富代「まさか、アンタの名前を新聞で拝める日がくるとは。世も末だわ」

久次郎「言ったろ？俺は必ずでかくなるって」

富代「（小声）アタシはあの頃が一番楽しかったけどね」

久次郎「ん？」

富代「い、いや。何でもないよ」

久次郎「それより約束。覚えてるか？」

○豪邸

新築の日本家屋の豪邸。久次郎は富代に見せる。

久次郎「好きにつかえ」

富代「こ、このお屋敷が？アタシの？」

久次郎「もう働かなくていい。銭もやる。家」

族を呼ぶなり好きにしろ」

久次郎「ただ、オレが来る時は居ろ。いいな」とまどいながらもうなずく富代。

○桜製糖・社長室

駒場「震える駒場。書類を見て激怒。」

○同・会議室

会議室には駒場、滝田、他の幹部達。部下に怒鳴る駒場。

駒場「株が買い占められたっ！なぜ知らせなかった！」

滝田「社長がコレとの温泉旅。決して邪魔をするなどおっしゃったので」

駒場「小指をあげる滝田。この無能めっ」

滝田「社長。これを機に製糖業界で連合を組

みましよう。でなければいつまでたってもイギリスに・・・」

駒場「使用人は茶を滝田にぶっかける。下を向く滝田だが、目は冷めている。」

駒場「誰だっ！」

駒場「誰だっ！」

久次郎「き、貴様は是本。どうやって入った！」

駒場「誰かコイツをつまみ出せっ！」

久次郎「だが誰も動かない。もうこの会社。ア

ンタのじゃねんだわ」

久次郎「クックツツと笑う久次郎。起きた株の買占め。犯人はだあれだ？」

久次郎「ハッとする駒場。己を指さす久次郎。」

久次郎「愕然とする駒場に紙を見せる久次郎。

駒場「ま、まさか芸者の春菊が温泉をねだったのもっ！」

久次郎「不敵に笑う久次郎。

滝田「申し訳ありません。日本の製糖の未来のためには……」

駒場「裏切り者めっ！」
顔に唾をかける。駒場は滝田の

久次郎「おい。つまみだせ」

駒場「是本。貴様、ろくな死に方せんぞ」
み連れて行く。駒場の両腕を掴

駒場「是本。貴様、ろくな死に方せんぞ」
連れ出される駒場。

○新聞印刷所

刷られる新聞。文字は「是本久次郎快
進撃。東京株式取引所買収二続キ桜製
糖買収。日本ノ正月ハ是久ノタメニア
リ」

○巨大な屋形船（夜）
夜の川に浮かび光る大きな屋形船。

○同・中

中では社員達が宴会で芸者達と大盛況。
数人の芸者に膝枕の久次郎。皆、泥酔。

久次郎「お前らっ。男の生きる糧は何だ？」
久次郎「仕事、酒、女。これがなくちゃ生き

てる意味が無い」
社員達「その通りですっ！社長っ！」

久次郎「では男の一番の敵は？」
久次郎「それは飽きだっ！つまり満腹。仕

事、酒、女でも飽きは大敵だ」
フラフラで立って叫ぶ久次郎。

久次郎「くだらん仕事は人生を棒に振る。酒は飲み過ぎりや吐く。どんな女も三回抱けば飽きるっ！」

久次郎「社員達は聞き入る。飽きない。だから価値があるっ！」

久次郎「大笑いの久次郎と社員達。そして稼げ」

○同・外
川に向かって小便をする久次郎。

○同・中への入口
酔ってフラフラで歩く久次郎。前に現れる善五郎、庄造。

善五郎「久次郎。やりすぎだ」

久次郎「やりすぎ？社員をねぎらってんじやねえか」

庄造「芸者の黄色い声が聞こえる。

乱痴気騒ぎは控えろ」
久次郎は大笑い。

久次郎「嫉妬しか出来ねえ馬鹿共。奴等は妬み、そねみ、愚痴。それしか能がねえんだ」

庄造「そういう態度が敵を生むんだっ」

久次郎「無能のやつかみは最高のつまみだ。

嫉妬されるのは気分がいいぜ」

芸者「久次郎様あ」

久次郎は大笑いで芸者を抱き寄せると中へ戻る。首を振る庄造と善五郎。

○井上馨邸・廊下
牟田は焦った様子で速足で歩く。

○同・洋間
井上薫が事務仕事。ノックの音。

井上「入れ」

牟田の声「失礼します」
ドアを急ぎ開けて入る牟田。

牟田「井上様。どういことですか？」
 井上「何がだ？」
 牟田「亜細亜紡績六万株を売却と聞きました」
 牟田「どうか、おやめください。このままで
 は社員一同路頭に迷って・・・」
 井上「もう決まったことだ」
 牟田「しかしっ！」
 井上「机を強く叩く井上。」
 井上「亜細亜紡績はいつまで三井の傘下に
 いるつもりだ。いい加減一人立ちしろっ」
 牟田「し、しかし急すぎますっ！中川さんが
 亡くなられてからこんなすぐに」
 井上「誰だ？」
 井上「入ってくるのは越。」
 越「井上様。牟田さん。失礼します」
 井上「お前は確か・・・」
 越「越祥応と申します」
 井上「あの華僑の大物相場師か。何の用だ？」
 越「その株。私が買い取るのはいかがで？」
 越「井上様は亜細亜紡績株を売って資金にし
 たい。だがそうなる株が下落し社の運営
 に支障がきたす。それでは牟田さんが困る」
 越「ならば私が全株買うことで株価を安定させ
 る。これなら一石二鳥では？」
 井上「ふーむ」
 牟田「た、確かに妙案です」
 越「では」
 越は井上と牟田の手をにぎらせる。

○丸藤・社長室
 久次郎「上には地球儀。地図を見る久次郎。机の
 全て手に入れた」
 滝田「お見事です。すでに資産は1000万

久次郎「円に」

久次郎「あとは亜細亜紡績を手に入れば」

久次郎「久次郎は地球儀を見て回す。次、世界に出る。次の戦いも重要な点がある。だ」

久次郎「ただ社長。おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

久次郎「おかしな点がある。だ」

越「持たない者は持つ者に従う。世の理だ」
 牟田「越さん。あんた株の操作をしてるな！」
 越「何か問題でも？」
 牟田「社の信用が無くなるっ。やめてくれっ。それにっ」
 越「株価百五十六円から百六十円に競り上げ？ 驚く越。」
 越「なぜだ。なぜ俺の売りを上回る！」
 牟田「誰かが買占めをはじめたんです」
 越「は苦い顔。」
 ○証券会社・丸藤
 久次郎「百人程の社員の前で演説する久次郎。るな。徹底的に買い占めろっ！ 容赦はするな。死力を尽くせ」
 皆、盛り上がる。
 久次郎「今一位は坂入、お前だ。受け取れ」
 社員・坂入（34）が前に来る。分厚い札束を久次郎は坂入に渡す。坂入の瞳から涙。久次郎はからかう。
 久次郎「おいおいっ。泣くほど嬉しいのか？」
 坂入「首を振る坂入。」
 坂入「そ、そうじゃないんです」
 久次郎「だったらなんで」
 坂入「・・・」
 久次郎「話してみろ」
 坂入「笑う久次郎に話し始める坂入。た『とし』。自分にはガキの頃、可愛がってた『とし』。坂入の話聞く。
 坂入「ただウチは大家族で貧乏。俺は『とし』を背負って、風呂焚き、勉強をやり、二宮金次郎って笑われながら頑張っていました」
 久次郎「それで？」
 坂入「ある日、親父が、お土産にイカを貰ってきてくれました。めったに食えないご馳走。皆、喜びました。ただその晩、『とし』」

がイカにあたつてしまいました」

坂入「苦しむ」としを見て、俺は『医者に連れてつて』と頼みました。けど皆が、ダメって。なぜなら『金が無かったから』です」

坂入「坂入は目をつむる。」

坂入「医者は贅沢。となりの地主も金を貸してくれず、結局『とし』は・・・泣。」

坂入「あの時。あの時この金があればっ！」

坂入「皆、静まる。久次郎は拳を握りしめる。は末の弟を学校にやれるようになりまして。全ては社長のおかげです」

坂入「坂入は久次郎に深々と頭を下げるが、久次郎は坂入の肩をつかみ強く語る。

久次郎「勘違いするなっ！ お前がっ！ お前自身」

「己の力でその金を掴んだ。誇りをもて！」

坂入はうなづく。

○丸藤・大阪支店

沢村「今日は大阪支店。明日は東京本店。毎日交代で株を買い占めるんだっ！」

○亜細亜紡績・社長室

牟田「彼らでした」

新聞には「是本久次郎一派。本格的な二重細亜紡績ノ買収開始。守ルハ華僑ノ大物相場師越祥応」の文字。

越「あの時の小僧がここまで」

越「叩き潰す」

○東京株式取引所
越祥応が二頭立ての馬車で来

る。越が下りると人混みが越を避けて、
越の歩く道ができる。
越「東京市場は俺のものだ」

○丸藤・社長室

久次郎「久次郎は怒りの表情で新聞を読む。

久次郎「黒幕は貴様か。越祥応」

滝田「株の大部分を所有して、高くなれば売

り、安くなれば買戻しする。一人で相場を

操っています」

久次郎「つぶす」

○同・事務室

沢村「働く社員たちと久次郎と沢村。

沢村「一七〇円まで上がったのが一五五円ま

で落ちました」

久次郎「買えっ」

○亜細亜紡績・社長室

牟田「向かい合う越と牟田。

牟田「百七十円まで上げられたのを一六〇円

に下げました」

越「売るぞ」

牟田「しかし勝てるでしょうか？これ以上の

戦は社員や株主に迷惑が．．．．」

越「この勝負。負けられん」

○丸藤・社長室

久次郎と滝田、沢村が会議。

滝田「二週間以上接戦が続いています」

沢村「百九十五円まで買い煽ったのを、百九

十円まで引き落とされました」

久次郎「やるかやられるか。それにしても現

金と仲間が欲しい」

二代目野田「ガチャリと入ってくる二代目野田。

二代目野田「お久しぶりです」

久次郎「の、野田さん！どうしてここへ」

二代目野田「是久さん。その仲間に私を入れ

てくれませんか？」

喜ぶ久次郎。

久次郎「願ってもない！ アンタがきてくれれば百人力だ！」
笑顔の二代目野田。

○羽田・広大な空き地
久次郎と大隈が話す。

久次郎「大隈先生。お話とは？」
大隈「この羽田の空き地。ここもお前の土地と聞いた」

大隈「大隈は笑顔。頷く久次郎。
空を飛んだ話。知っているか？」

大隈「うなずく久次郎。大隈は空き地を見て手を広げる。」
大隈「これだけの広さ。将来、ここは空飛ぶ機械の港に出来るかもしれない。もしお前がその権利を握れば、どれだけの利益が出るか」

大隈「大隈はしゃがむ。
大隈「越との仕手戦。日本中が迷惑を被っている。辞めてくれたら空飛ぶ機械の便宜を図ろう」

大隈「遠くを見つめる大隈。
大隈「今ある紡績業界の買収よりも新たな産業を作れ。お前にはそれができる」

大隈「首をふる久次郎。
大隈「何か越に因縁でもあるのか？」

大隈「目が陰しくなる久次郎。
大隈「私怨を捨てろ。冷静になれ」

大隈「首を振る久次郎。
大隈「無理か」
お辞儀をした後に久次郎は去る。

○亜細亜紡績・社長室
牟田「牟田と越が向かい合う。」

牟田「もう止めましょうっ！ 二〇〇円を突破しました。是久一派は野田商店も味方につけたとか」

越「現金は三菱が貸してくれた。絶対勝つ」

○越の豪邸（夜）
越「是の本の小僧めっ！」を飲む。酌をするきく。

越「是の本の小僧めっ！」を飲む。酌をするきく。
下を向くきく。越は酒瓶を投げる。割れる酒瓶。

きく「もうおやめになったら？」
越「黙れっ！女に何がわかるっ」
越はきくに平手打ち。

○丸藤・事務室
疲れ切った社員達。久次郎と滝田が会話。

久次郎「お前たちっ！ここが踏ん張りどころだっ！現金をかき集めろっ」
滝田「社長。しかしどこも借りるあてが」
久次郎「勝てば何十倍にもなるんだぞっ！」

滝田「しかしっ」
久次郎「株価は？」
滝田「二百三円です」

久次郎「久次郎は喜び社員達に大声で語る。
三高地と同じ。日本は二百三高地を占領して勝った。俺らの勝ちだっ」

○風月花壇・鳳凰の間
社員達がズラリ。酔っぱらった久次郎、沢村、滝田、野田が前に並ぶ。

久次郎「まだまだ激戦は続く。お前らがンバれよっ！」
社員達「おーっ」

久次郎「今日は趣向を凝らした贅沢を見せてやるっ！庭にしろっ」
社員たちは、皆、庭に出る。

○同・大庭園
広々とした庭には、一段下がった81マス。の将棋盤に見立てた巨大な床。その上には、白い半裸薄着の40人の芸妓達が将棋の駒に見立て四つん這いで並ぶ。久次郎は叫ぶ。

久次郎「これぞ女将棋っ！ この女駒で俺と
将棋をする奴はおらんか！っ！」
久次郎「大盛り上がり。一局どうですか？」
久次郎「野田さん。一局どうですか？」
野田「はは。ずいぶんと贅沢な将棋で」
久次郎「酒を飲む久次郎。さあ動け。取られた駒
は脱げよっ」
野田「では私も。五六歩！」
芸妓は黄色い声で指示通りに動く。皆、
興奮して騒ぎ始める。
× × ×
乱痴気騒ぎの久次郎や社員達。その様
子を遠目で見て一人憂鬱な沢村。沢村
野田「酔いましたか？」
沢村「い、いえ。そういうわけでは」
野田「では何か？」
沢村「こんな乱痴気騒ぎ。世間に漏れたりで
もしたら。野田の目は鋭く沢村を見る。
沢村「それにあの娘達も。・・・」
野田「落ち込み下を向く沢村。
野田「沢村さん。やはりあなたは優秀だ」
沢村「えっ？」
野田「私は自社を百年続く会社にしたい。だ
が是久さんは周りが見えなくなっている。
これでは。・・・」
野田「野田は軽く酒を飲む。
野田「長居は無用。沢村さん。何かあればあ
なたを迎える準備がありますよ」
野田はそっと沢村の肩に手を置く。

○亜細亜紡績・社長室
牟田「越に詰め寄る牟田。
牟田「越さんっ！株価は二五〇円っ！
それには久側は大連合を組んだ。これ以上
は。・・・」
越「負けられないっ！」
牟田「もとはといえればアンタが空売りをしな

ければ」

○丸藤・社長室

滝田「社長。もう現金が・・・」
久次郎「俺の土地を担保に借りた。これで何とかしろ」

滝田「社長っ！破産しますよっ！」
久次郎「勝てば全て返ってくる」

久次郎「心配そうに見る沢村。ノックの音。」
社員「誰だ。後にしろ」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

社員「社長・・・」
久次郎「社長・・・」
社員「社長・・・」

越「きく、すまない。だが俺に平民の暮らしは無理だ」

越はかけた首吊りの縄を首にかける。

○丸藤・事務室

狂喜乱舞の社員達。久次郎は前に立つ。

社員 1「勝ったぞ——っ！」

社員 2「天下の亜細亜紡績が傘下になった

っ！」

久次郎「受け取れ——っ」

久次郎は札束を社員に配りまくる。

○越の屋敷

電話が鳴り続ける。誰もいない部屋で、首を吊った越の遺体が揺れる。

きく「旦那様。失礼します」

きくが襖を開けて入る。入った途端、きくはお茶を床に落とす。倒れるきく。

○風月花壇・鳳凰の間（夜）

社員達が飲み会。酔っぱらった久次郎、滝田、野田が前に並ぶ。沢村が慌てて走ってくる。沢村が久次郎に耳打ち。腰を抜かし倒れる久次郎。久次郎は走り出す。

○越の本邸

曇りの日。簡素な葬式。

○同・入口

喪服姿のきくが出てくる。久次郎が外で待機。久次郎が手を上げるが、きくは久次郎と一切目を合わさず去る。

○丸藤・会議室

鬼気迫る顔の久次郎。滝田、沢村や幹部たちが会議。

久次郎「日本の主要産業の買い占めは終わった。次は世界だっ」

滝田がいさめる。

滝田「社長。買収した亜細亜紡績で、反是本
運動が起きています。まずは牟田氏を復帰
させるのが先決かと」
沢村「先輩。一息つきましよう。攻めより守
りに：：」
久次郎「馬鹿野郎っ！」
久次郎「久次郎は沢村を殴る。」
モルガン「ここで止まってどうする！日本の
頭をかきむしるにまだまだ足りねえ！！」
久次郎「オレは。オレは憧れの男の人生を終
わせた！もう進むしかねえんだっ！！」
久次郎「あー！ー！ー！っ！」
○東京株式取引所・全景
奇麗になった洋館。
T・明治40年（1907年）。日露
戦争の戦勝景気の反動と、戦費外債返
済の時期到来に景気は衰退。それでも
強気の一点張り買いを止めなかった
是本久次郎は読みを外しあつという間
に破産。現代価値にして数千億から数
兆円の資産を失った。その後、仲間、
社員、兄、叔父は、去っていった。

○個人商店・店先
T・大正2年（1913年）。
よれよれのボロい和服を着た久次郎は
店主に熱く投資話をする。
久次郎「経営に助言する会社。これは絶対成
功します。ぜひ投資を」
店主「ま。考えなく返事をする店主。」
店主「出て行く久次郎。奥から店主の妻。
店主の妻「あんた。なんの話？」
店主「うさんくさい儲け話さ。破産したヤツ
のこんなて誰がきくか」
店主の妻「あれが兜町の風雲児と言われたた
是久さんねえ」

店主「おい。塩まいてくれ。ケチがつく」

○東京駅

久次郎「歩く久次郎。東京駅の前には人ばかり。肩をすぼめ

久次郎「飲んでやさぐれ。ウイスキー瓶を開け飲む久次郎。酒を

久次郎「飲んでやさぐれ。人ばかりから大歓声。人々は日の丸と

人々「青天白日旗をあげる。革命万歳！」

久次郎「中山は人々と握手。中山は久次郎と熱く握手。

久次郎「中山は己の姿を見てとっさに隠れる。逃げようとする久次郎だが人々に押されて、中山と鉢合わせ。中山は久次郎に気づく。」

中山「是本さん！！！」

中山「笑顔の中山は久次郎と熱く握手。

中山「お久しぶりですっ！腐敗した清王朝は倒され中国は生まれ変わりましたっ！」

中山「あなた『現実を見ずして何が理想だ』。あの言葉で私は目が覚め革命を為すことができたのです」

中山「久次郎は、下を向いている。

中山「あなたは資金援助。一生忘れません」

中山「中山は久次郎のボロ着を見て気づく。

中山「きもあれば悪いときもあります。是本さんならまた返り咲きます。あの時の恩を返させてください」

中山「中山は小切手を出す。

中山「ゴクリとつばを飲む久次郎。だが上を向いた後、久次郎は中山を見る。

久次郎「大丈夫だ」
 久次郎「堂々と中山を見る久次郎。」
 久次郎「オレは窮していない。施しは不要だ」
 中山「施しなんてそんな・・」
 久次郎「それよりももっと欲しいものが」
 久次郎「安産のお守りを出す久次郎。」
 中山「それはめでたいっ！」
 久次郎「妾もたくさんいたけどな。みんな逃げられたよ」
 久次郎「自嘲して笑う久次郎。」
 中山「そ、そんなことではないのですか？」
 久次郎「ああ。何よりありがてえ。錢よりも」
 中山「・・・。わかりました」
 中山「中山は考え込み、取り出した紙に文字を書く。文字は、「文夫」と「文子」。
 中山「男なら文夫。女の子なら文子では？」
 久次郎「笑顔になる久次郎。」
 久次郎「いい名前だ」
 久次郎「久次郎は中山の手を握る。」
 久次郎「あんたの名前『孫文』の文から文夫に文子か」
 久次郎「うなづく中山。」
 久次郎「ありがとう」
 礼をして人ごみに消えていく久次郎。」

○民家・居間
 質素な民家。狭い居間で、久次郎とさなが将棋。富代の背には赤ん坊の文子。
 久次郎「さなは女だてらに将棋が強い」
 さな「ふふふ」
 照れるさな。考える久次郎は赤ん坊の文子をあやす。
 久次郎「べろべろばあ」
 笑う富代。
 久次郎「文子。すぐの辛抱だ。父ちゃん。すぐに戻り咲いて贅沢させてやる。待ってるよ」
 富代はあきれる。

富代「贅沢？ バカ言ってるんじゃないよ」

久次郎「なになに？ 亭主に向かってバカと

は！」

富代「家族そろって一緒に暮らす。これ以上の贅沢があるかい？」

ハツとする久次郎。

久次郎「そ、そうか・・・」

富代「そうだよ」

富代は力強く返す。

さな「義兄さん」

さなの指した歩は王を指すが裏返ってない。

久次郎「さな。成らないのか」

さなは首を振る。

さな「だってもうアタシの勝よ」

久次郎「ん？ 何？」

じつと将棋盤を見る久次郎。

久次郎「ほ、本当だ」

久次郎は参ったの格好。富代とさなは大笑い。

N・中山樵こと孫文は、革命の父・初代中華民国総統としてその名を歴史に残した。ただし日本初の「成金」である久次郎のモデルの人物を現在知る者はほとんどいない。だが、「一代で成り上がった者」としての代名詞「成金」の言葉は今にも残されている。
(おわり)

【参考文献】

- 『実業之世界』（三田商業研究会・1953年）
- 日本取引所グループ『日本経済の心臓証券市場誕生！』（集英社・2017年）
- 生方敏郎『明治大正見聞史』（中公文庫・1978年）
- 森銑三『明治東京逸聞史1』（東洋文庫・1969年）
- 森銑三『明治東京逸聞史2』（東洋文庫・1969年）
- 鍋島高明『マンガ日本相場師列伝』（PANROLLING LIBRARY・2007年）
- 生形要『兜町百年』（東洋経済新報社・1967年）
- 紀田順一郎『カネが邪魔ではない――明治大正・成金列伝』（新潮選書・2005年）
- 越谷市『越谷市史』（越谷市・1973年）
- 春日部市『元祖！成金鈴木久五郎』（春日部市郷土資料館・2019年）
- 藤口透吾『成金太平記』（朋文社・1956年）
- 武藤山治『私の身の上話』（住吉村・1934年）
- 『実業之世界』（実業之世界社・1909年）